

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14796

研究課題名(和文) 近世建築生産史における「大工棟梁」の組織と技術に関する研究

研究課題名(英文) Study on organization and techniques of carpentry in early modern period

研究代表者

山岸 吉弘 (YAMAGISHI, YOSHIHIRO)

日本大学・工学部・講師

研究者番号：40454201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、江戸時代を代表する市井の職人である「大工棟梁」について、その建築生産活動の内容や特質を、歴史的事象として一般化・普遍化することにある。そのような抽象的な議論をする土台を形成するために、まずは具体的に大工棟梁の足跡を追わなければならない。埼玉県・茨城県・福島県を範囲として大工棟梁の調査・研究を実施し、結果を論文としてまとめ発表した。東日本の大工棟梁について、成立し成長し展開する過程の一端を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当該学問領域では既に多くの蓄積があり、特に京都や大阪など近畿地方を対象とした研究が盛んに行われている。それを可能にしたのは、当地に数多く残された古文書の存在であった。翻って、本研究の対象地域である東国の状況を見るに、まとまって残る古文書群は存在しない。それは、近畿地方と他の地域では建築生産の構造が異なっていることを意味している。つまり、これまでの研究に頼っては全国的に通用する一般論を構築することはできないのである。本研究は、そのような近世建築生産史研究の偏向や空白を埋めることができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to generalize the contents and characteristics of the building production activity for the "DAIKU-TORYO" who is a craftsman of rural in the Edo period. In order to form the foundation for such an abstract discussion, we must first specifically follow the footsteps of the carpenter master. I conducted a survey and research on carpenter in Saitama Prefecture, Ibaraki Prefecture, and Fukushima Prefecture, and summarized and published the results. I was able to clarify a part of the process of establishment, growth, and development of the carpenters of Eastern Japan.

研究分野：日本建築史

キーワード：建築生産 生産組織 大工棟梁

1. 研究開始当初の背景

当該学問領域では既に多くの蓄積があり、過去には学界の展望や研究の総括が試みられるなど、成果は一定の水準を超えたといえる。特に、京都や大阪など近畿地方を対象とした研究が盛んに行われ、京大工頭中井家や畿内・近江六ヶ国大工組などは詳細に論じられている。それを可能にしたのは、当地に数多くの残された大工に関連する古文書の存在であった。幕府は、近畿圏における建設行政の担い手として中井役所を設置し、京市中のみならず周辺の農村までも管轄域として大工や大工組を支配させた。そのような統治機構が行政文書の必要性を生じさせ、結果的に一帯には多くの古文書が残ることとなる。つまり、近畿圏の研究が進展するには、歴史的な必然性が認められる。

翻って、本研究の対象地域である関東地方を中心とする東国の状況をみるに、一定の地域にまともに残る古文書群は存在しない。それは、そもそも近畿地方と他の地域では建築生産の構造が異なっていることを意味していよう。つまり、これまでの研究によって解明されてきた歴史的事実をもって、全国的に通用するような一般論を構築することはできないのである。本研究は、そのような近世建築生産史研究の偏向や空白を埋める成果を期待することができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、江戸時代を代表する市井の職人である「大工棟梁」について、その建築生産活動の内容や特質を、歴史的事象として一般化・普遍化することにある。現在の近世建築生産史という学問領域にあって、既に大工棟梁に関する研究の蓄積は膨大で、個別具体的な報告は枚挙に暇がない。一方で、個々の事例を総合し、代表的な大工棟梁モデルへと昇華させ、それが果たした役割や意義を広く社会史・文化史・地域史の中に位置付ける試みは極めて限られている。本研究は、大工棟梁の存在様態をモデル化することでその実態や特質を明確にすると共に、大工棟梁を中心とする新しい近世建築生産史の構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究の目的を確実に達成させるため、内容を三つに区分して各年度に配分し、段階を追って研究を進める。初年度は、大工棟梁の存在様態をモデル化する作業を行い、次年度以降に実施する研究の布石とする。次年度は、福島県域を対象とした文献調査・現地調査を踏まえて大工棟梁の事例収集を悉皆的に行い、その中から適宜に個別事例を選定・分析して詳細な考察を加える。最終年度は、初年度で一般化・普遍化したモデルを、次年度で収集・考察した個別事例と対照する方法で相互比較し、モデル化の妥当性を検証する。

4. 研究成果

研究の目的を達成させるために、具体的に研究の対象を絞って考察した。主に三つの観点から研究を進め、成果として論文にまとめ公表した。一つ目は埼玉県にある鷲宮神社と茨城県の古河城下町の大工について、二つ目は福島県の霊山町に所在する霊山寺の大工について、三つ目に福島県下を範囲とした中世の大工について、それぞれ学会で発表している。いずれも、棟札などの史料を収集し、大工を網羅的に調査した上で、考察に適当な対象を選定している。その後、社会的な背景を踏まえつつ、当時の大工の活動内容を解明し、特徴を分析した。

(1) 鷲宮神社と古河城下町の大工について

建築生産史における大工技術の集積と拡散という問題について、近世相模国を対象に考察したことがある。結論としては、村落外からの技術の摂取(成立期) 村落内への技術の蓄積(成長期) 村落内外での専門的な労働力の提供(展開期) という各段階に区分して理解する方法を提示している。大工棟梁という歴史的な事象を把握する一つの客観的な視点として有効なのではないか、という趣旨である。成立期・成長期・展開期の三つに区分する社会的な枠組みから大工棟梁を理解することの蓋然性を補強し、成立期・成長期・展開期として変遷する歴史的な要因を探究することを、まずは研究の手掛かりとした。

江戸を中心に南関東の相模国とは反対に位置する北関東の武蔵国・下総国に場所を移し、特に鷲宮神社(埼玉県久喜市)と古河城下町(茨城県古河市)に注目した。鷲宮神社は、関東平野の中央に鎮座する古社で、創建は詳らかにならないものの古代に遡ると考えられ、中世以後から近世を通じてさまざまな事跡を今に伝えている。また、同社には多くの棟札が遺されており、社殿の造営・修復の経歴や手掛けた職人などが明らかとなる。古河城下町は、最大16万石を領有する城主により大規模に開発され、日光街道の宿場町としても機能するように建設されるなど、北関東を代表する繁華な都市である。町割りされた市街には職人町が整備され、数多くの大工が居住し、建築生産活動に従事したことが想定される。

考察の結果をまとめると、中世以前に遡る社歴を有する鷲宮神社では、帰依する武家により社殿の造営が行われており、大工は他所より呼び寄せられていたことが明らかとなった。一方で、

飛騨守を名乗る大工が鷺宮神社に帰属していたようであり、門前の集落において屋敷を手掛けるなど、微力ながら地域において生産性を有していた。近世に入り、高齢となった飛騨守の名跡を継ぐ職人はいなかったようであるものの、鷺宮村に居住する大工は存在していた（成立期）。江戸時代前期の17世紀は造営を行うにも都市域の職人に頼らざるを得ない状況であったらしく、隣接する古河城下町の大工棟梁や江戸の屋根屋を招いていた。鷺宮村には大工等の職人が居住していたであろうが、棟札等には名前は記録されていない。高度に専門的な技術は外部に頼り、単純な労働力を提供する中で、徐々に生産力を蓄えていったと考えられよう（成長期）。江戸時代中期の18世紀に入り造営を鷺宮の職人が主体的に行えるようになり、秋屋姓の実力を備えた大工が出現し、造営の体制も在方の職人で組織できるようになる。更に、秋屋の他にも川田姓など複数の有力大工家も成立し、地域の建築生産を独力で賄えるまでに至る（展開期）。

古河城下町は、都市が建設される際に職人町も整備され、計画的に大工を集住させていた。渡邊姓を筆頭に阿部・川邊・飯嶋姓の各大工が団結することもでき、鷺宮神社の造営でみられたように、当初は他の地域を圧倒する高度な建築生産力を保持していたようである。一方で、態勢を持続させることは困難であったらしく、常に周辺村落に対して優位な立場にあったとは言い難い。隣村にある野木神社の造営では、入札において農村の大工と競り合い、落札したり落札できなかったりした。

鷺宮神社や古河城下町の大工の変遷を辿るに、一面で都市と農村における建築生産力の程度が平準化する過程と理解することができる。換言すれば、多くの大工が対等な立場で仕事をし得る状況へと変化していったことになる。一方で、仕事を獲得し遂行するために必要な諸々の要素も大工が自力で手に入れる必要が生じた。そのような中で、建築生産に必要な技術は特定の土地や家に拡散・集積されていったと考えられるだろう。

鷺宮神社や古河城下町の大工の変遷を辿るに、一面で都市と農村における建築生産力の程度が平準化する過程と理解することができる。換言すれば、多くの大工が対等な立場で仕事をし得る状況へと変化していったことになる。一方で、仕事を獲得し遂行するために必要な諸々の要素も大工が自力で手に入れる必要が生じた。そのような中で、建築生産に必要な技術は特定の土地や家に拡散・集積されていったと考えられるだろう。

(2) 霊山寺の大工について

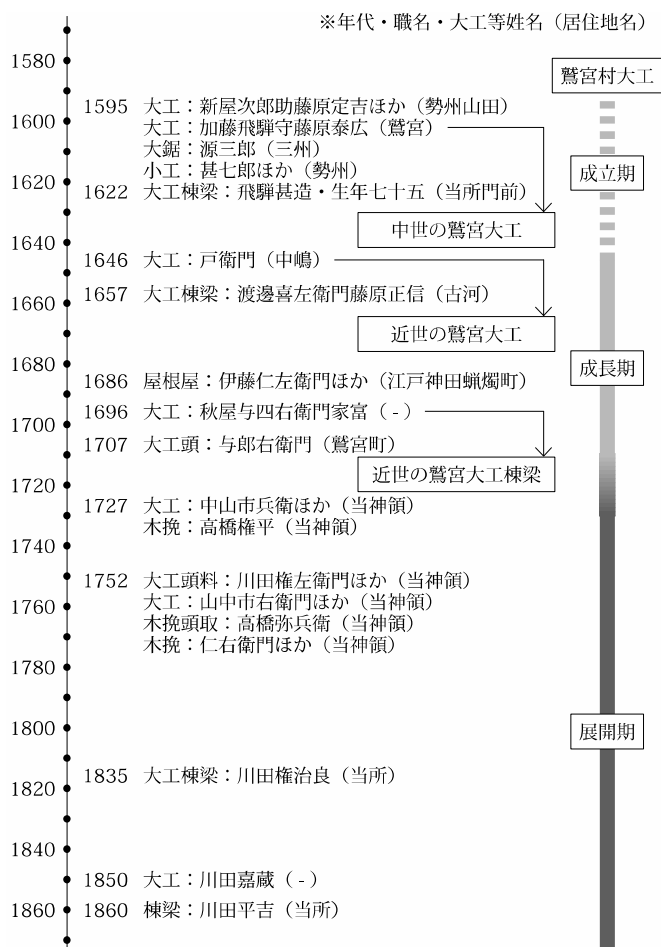
福島県の中通りと浜通りの地域は、南北に連なる阿武隈高原により隔てられている。その北端にそびえる霊山は、古来より霊験あらたかな地として信仰を集めたい。かつては奈良時代に開かれた霊山寺（先霊山寺）が広大な山上伽藍を誇っていたと伝えられているが、南北朝時代の動乱にあってことごとく灰燼に帰した。その法灯を継ぐとされる霊山寺が、霊山の麓の集落である大石（伊達市霊山町大石）に営まれている。

霊山寺（伊達市霊山町大石倉波）には多数の棟札やその写しが残されており、堂舎の造営に関して知ることができる。携わった大工等も記されていることから、特に建築生産の観点から考察を試みる。

その結果、霊山寺では微力な大工技術が芽生え大きく成長したというよりは、他所で成立したものが移入し、確実とはいえないまでも「奈良」という地名が残されており、元は近畿地方でなかったかと想像される。その際、霊山寺という機関の果たした役割は大きいようで、15世紀の段階では「大工」など職人を統率する者の人名は仏僧を思わせる。つまり、仏教文化の伝播が大工技術の転移を可能にしたといえよう。一方で、大工技術の継承は寺院内だけで行われるのではなく、在地の有力者にも普及した。16世紀になると、当地を領有した武士の配下にある大橋姓の人々が担い手となり、寺院から郷村へという技術の一般化は戦国期という時代背景が関係していよう。始めは寺院と郷村のどちらにも技術は保持されていたようだが、17世紀にもなると寺院には継承されなくなり郷村のみとなる。その後、18～19世紀には大橋姓の大工の足跡も辿れなくなり、大石村に大工は存在せず、わずかに半農半工の村民が居住していた程度であった。

(3) 福島県下の中世の大工について

大工の存在を直接的に確認することのできる文字史料について、近世のものと比較して、中世



のものは圧倒的に数が少なく、福島県内においても状況は変わらない。残存する幾つかの史料より具体的に大工の肩書きや氏名を知ることができる。

その結果、中世において棟梁という言葉は見られず、「大工・小工」と「番匠」が使用されていることが指摘できる。大工を頂点に単独ないし複数の権大工や小工がそれに続き、多くの番匠を従えるというピラミッド型の組織を形成している。一方で、永禄2年(1559)の田村大元神社(三春町字山中)にある「並番匠」という肩書きより、番匠にも差異の意識が出現していることが看取される。更に、天正12年(1584)の千住院(郡山市湖南町福良)では個々の「番匠名」が記載されており、集団としての番匠ではなく個人として把握されている。大工・小工・番匠という生産組織内の階級が崩れ、新しい体制へと変容していく端緒と見なせよう。

慶長5年(1600)の白鬚明神(二本松市戸沢)にある「番匠大工」という肩書きより、番匠と大工が同化していることが分かる。「番匠の大工」と理解するならば、元来は番匠だが大工のような位置付けにある、というように解釈することができよう。中世の番匠が近世の棟梁と同じような役割を果たしつつある。このように、番匠が社会的な変容を遂げることで棟梁が出現するようになる、とその後の変遷が想定される。

研究を総括すると、中世から近世へと移行する中で大工棟梁が出現したこと、農村の大工が時代の変遷とともに台頭してきたこと、技術の移動が中央から地方および都市から農村へという流れであったこと、等々を指摘することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山岸吉弘	4. 巻 69
2. 論文標題 近世甲斐国における下山大工と佐久大工の争論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 建築史学	6. 最初と最後の頁 22-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山岸吉弘	4. 巻 745
2. 論文標題 近世相模国大山寺における十二坊と御師の建築について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 505 - 515
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.3130/aija.84.1979	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 近世下総国古河町の大工
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 近世相模国大山寺における寺内・門前の屋敷と住宅
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山岸吉弘
2. 発表標題 伊達市靈山町靈山寺の大工
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤井恵介先生献呈論文集編集委員会 編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 446
3. 書名 建築の歴史・様式・社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----